

畜産廃棄物の発生を無くすために、リユースできるバイオ発酵土敷料の開発事業

令和5年4月26日

信楽高原 山田牧場

事業目的	<p>家畜舎の汚物敷料をリサイクルさせる方法を研究し、2年間の実験を通して畜産廃棄物のごみをゼロにできるリユースの仕組みを確立できる目途がついた。これにより、新敷料となる低密度バイオ発酵土の必要性を発信して、新たな商品として安土バイオ発酵土という商品名を付けて認知されるように進めて行く。</p> <p>同時に、従業員の働き方改革を提案して、安定した運営計画を実行する。</p>
事業概要	<p>従来の敷料は、家畜舎の環境を整えるために、吸水目的で用いる。当牧場が考案した安土バイオ発酵土は、2年間使用してきたが透水性は保たれているので、実用性が高いことを証明した。</p> <p>実用するための機能面については、開発メーカーと相談を行い、再生発酵装置の改良を提案した。これにより、労働内容を簡素化できる。</p> <p>又、牛舎の構造についても、透水性舗装の摩耗を防ぎ、修復の容易な方法を考え、特許申請を行った。</p> <p>実際の作業の中から牛を追う作業において、床がフラットの舗装で仕上げている利点を生かし、牛舎内に十数か所回転扉を設けて作業効率を上げることにチャレンジしている。</p>
事業効果	<p>実験牛舎を前面に広げて公開施設とした。これにより多くの見学者がお見えになり、色々なご意見を拝聴できた。中でも、万博関連企業からのお誘いもあり、出店について数回会議を行っている。</p> <p>それによると、今回の取り組みは畜産廃棄物のごみゼロだけでなく、重機の運転回数や労働時間の大幅な低減による働き方改革とカーボンニュートラルに貢献できる事業であることが解った。</p>
今後の課題と方針	<p>前回の課題として取り上げていたリユースシステムの構造的なものは、すべて解消の目途がつき順調と言える。安土バイオ発酵土の再生発酵機械は、セパレーツ構造になっているが、作業効率の向上のために一体型に改良することを提案している。</p> <p>牧場の事業効果については、従来の堆肥舎が空になることで、牛舎に転用して増頭に結び付ける計画をしているが、現堆肥舎は補助金を利用した物件であることが解り、これから関係者との協議が必要となる。</p> <p>働き方改革に必要な作業効率のアップについては、従来の方法では不可能であったことを牛舎の改造に伴い、改善できることで大幅に達成できると思われる。</p> <p>畜産運営の維持が困難な昨今において、色々なご意見を拝聴できることによ</p>